

映画館のアトラクション（初期） の舞踊に関する一考察

杉山千鶴

I. 研究目的及び方法

1920年代における、浅草オペラから浅草レビューへの変遷の過程には、映画館で上演されたアトラクションが相当すると考えられる¹⁾。浅草レビューの始まった1929年7月以降の時期には、浅草の大衆は、そこで上演された舞踊を観て女性ダンサーの脚線美を拝みエロチシズムを感じ、また舞踊に対してその両方を要求していた²⁾。

本研究は、浅草レビュー以前の時期に、浅草の映画館で上演されたアトラクションのうち、舞踊及び舞踊を含むと思われる演目の、軽演劇における意義と特性を見出そうとするものである。

方法として、都新聞東京版の遊覧案内欄及び上掲広告より舞踊の演目を拾い出し考察を行った。

II. 結果及び考察

関東大震災以後、映画館では休憩時間に奏楽が行われた。舞踊の最初の上演は、1928年6月電気館のプロオグであった。従って、今回はこれ以後1929年6月までの期間を対象とする。

(1) 概観

電気館のプロオグに藤田・堺舞踊研究所のダンサーが出演したのを最初に、同年8月には劇場から映画館へと改装になった松竹座で、1929年に入ると計8館で舞踊が上演された。当時は無声映画の隆盛期であり³⁾、各映画館は専属のオーケストラやジャズバンドを抱え、これに歌手を招く等、音楽系のアトラクションが圧倒的に多かった。この聴覚に訴える物の中で、無声映画と同様、視覚に訴える舞踊が上演されたのである。

(2) 映画館のアトラクションの舞踊

① 舞踊

藤田・堺舞踊団、松竹楽劇部の他に、松竹座では外来舞踊団の公演があり、邦舞では川田芳子等が出演している。公演広告では、若さ・美人・潑刺・軽快等、躍動感をアピールし、また愉快・奔放・陽気な内容を売り物にするものも認められた。

② 舞踊を含む演目

レビューやヴォドヴィルが相当する。上映広告によれば、電気館と日本館の専属レビュー団は元浅草オペラの俳優を集め、前者はエロチシズムの話題を撒き、奇想多彩・ジャズ・ナンセンスを、後者は流行の先端を売り物にした。浅草劇場の春野芳子、河合澄子舞踊団、千代田館の美人座舞踊団、帝国館の南栄子等、宣伝文句のないものは、出演者の顔ぶれや名前の印象によってアピールし

たと考えられる。また松竹座と電気館は入場料をランク分けし、最低でも他の映画館より高額なのに観客動員できたのは、新着の洋画の専門上映館という、新し物好きな浅草の大衆にとって最大の魅力を有したことによるが、松竹座は外来舞踊団や付属養成機関で育てた松竹楽劇部に元浅草オペラのスター・高田夫妻のタカタ舞踊団、電気館は同様の専属レビュー団と、上演内容を期待できるメンバーだったことも関連すると考えられる。

III. 結 論

(1) 軽演劇における意義

松竹座と電気館は、上映広告でアトラクションにスペースを割いており、アトラクションが観客動員の一翼を担ったこと、いずれも専属レビュー団を抱え、その公演の場とし、特に松竹座は外来舞踊団の公演も行うなど、力を入れていたことが窺われる。他の映画館が演目・出演者だけの掲載だったのは、浅草レビュー以前の時期のため、レビューにはまだなじみが無く、観客動員には直接繋がらなかったためと考えられる。しかし“レビュー”の名称と、スピーディな展開というその特性を浅草の大衆に紹介し、これにより映画館の余興としてレビューを位置付けたと言えよう⁴⁾。

(2) 舞踊の特性

広告文によれば、明るい・開放的な印象を与える、楽しめるものであった。以後のアトラクションでは全面に押し出されたエロチシズムと脚線美も感じられたかもしれないが、初期においては、それよりも映画館でダンサーが颯爽と踊ること、そのような舞踊の上演こそが流行の先端であり、魅力だったと考えられる。そしてアトラクションは映画上映の繋ぎであるが、従来の奏楽が聴覚によって思考と視覚を中断させ休ませたのに対し、舞踊は作品の解釈や思考を余り必要としない、視覚による気分転換だったのである。

1) 杉山「浅草オペラから浅草レビューへの変遷」

お茶の水女子大学人文科学紀要第43巻 1990年 p.200

2) 杉山「映画館のアトラクションの舞踊に関する一考察—浅草レビュー期において—」第42回舞踊学会 1996年

3) 田中淳一郎「日本映画発達史Ⅱ」中公文庫1976 p.123

4) 浅草レビュー開幕当時、レビューは映画館の余興の単独興業という認識だったことも裏付けとなる。(嶋村竜三「レビューを生んだ人々」改造1933年12月号 p.103)

※ 本研究は、1996年度早稲田大学特定課題研究助成費を受けて行われているものである。